東京大学グローバルCOEプログラム
ゲノム情報に基づく先端医療の教育研究拠点
オーダーメイド医療の実現と感染症克服を目指して

参加無料・事前登録不要

GCOE特別セミナー＜医科学教育セミナー＞

第４回 疾患医科学ミニシンポジウム

ピロリ菌と胃がん・消化性潰瘍
～基礎と臨床の先端～

2012年 7月 12日（木） 16:00 -19:30

東京大学医科学研究所　講 堂　（港区白金台4-6-1）

はじめに　山川彰夫 特任教授 東京大学医科学研究所（世話人）

レビュー “H. pyloriと関連疾患”

加藤直也 特任准教授 東京大学医科学研究所 疾患制御ゲノム医学ユニット

ピロリ菌ゲノム ～超悪玉菌の成り立ち～

小林一三 教授 東京大学 新領域創成科学研究科メディカルゲノム専攻（世話人）

ヘリコバクター・ピロリ感染による宿主上皮細胞応答制御

三室仁美 准教授 東京大学医科学研究所 感染制御系細菌学分野

十二指腸潰瘍の患者はなぜ胃癌になりにくいのか？ ～遺伝子から分かるピロリ菌と病気との関係～

松田浩一 准教授 東京大学医科学研究所 シークエンス技術開発分野

ヘリコバクター・ピロリによる胃炎の発症機構を免疫から考察する

小安重夫 教授 慶應義塾大学 医学部微生物学・免疫学教室

H. pylori除菌と今後の胃癌診察

大野秀樹 助教 東京大学医科学研究所附属病院 先端診療部（ピロリ外来責任者）

質疑・応答、まとめ　　ファシリテーター・司会：加藤直也、山川彰夫

東京大学医科学研究所&先端科学技術研究センターGCOEプログラム http://www.ims.u-tokyo.ac.jp/gcoe/index.html
問い合わせ先：東京大学医科学研究所GCOE推進室　Email: gcoe@ims.u-tokyo.ac.jp　TEL:03-6409-2028
東京都港区白金台4-6-1（東京メトロ南北線・都営地下鉄三田線白金台駅2番出口から徒歩3分）

【概　要】

東京大学医科学研究所＆先端科学技術研究センターのグローバルCOE プログラム（GCOE）では、先端医療開発を目指した優れた研究拠点の創出と同時に、グローバルな医療課題に取り組む広い視野を持った「人財」を育成する事をミッションの2つの柱としています。

医科学研究所に学ぶ大学院生の多くは医師(MD)ではなく、学部時代のライフサイエンス教育と大学院における専門性の高い教育課程との間にギャップが生じる可能性が指摘されています。欧米でもTranslational Researchや医学研究に関わる非MDの学生・若手研究者に対する疾患の基礎知識教育などを目的とした医学教育プログラムの開発が行われています。また、医学領域における極度の専門化の進展から、自分の専門以外の疾患について基礎から応用・臨床までの先端的知識を常に持ち続けることは困難であるのが正直なところでしょう。これらの課題の解決と領域を超えた研究者間の協働を更に促進する目的で、「一回に一つの疾患や治療法にフォーカスし、基礎医学から応用、診断・治療、場合によって予防・公衆衛生などの専門家から、［非MDのライフ系院生・ 研究者や専門科外の医師・医療スタッフ・研究者にも理解できる事を念頭に置き］現状から最先端のコンパクトなレビューをする」形式の「疾患医科学ミニシンポジウム・シリーズ」を一昨年から開始いたしました。質疑・討議では、フロアとの間・専門家間のdiscussionから、将来の研究の方向性が見えてくるようなことも期待されます。

今回のシリーズ第4回目は、『ピロリ菌と胃がん・消化性潰瘍　～基礎と臨床の先端～』と題して、その持続的慢性感染が消化性潰瘍、萎縮性胃炎からさらに胃がんなどの消化器疾患やMALTリンパ腫などの疾患の発症に深く関わっている病原細菌であるピロリ菌と関連疾患にテーマを絞ったミニシンポジウムを開催します。 東大医科学研究所と附属病院、東大新領域創成科学研究科、慶應義塾大学医学部から、ヘリコバクター関連のゲノム科学・細菌学・免疫学の基礎研究及びピロリと消化器の先端診療に関わっている日本の第一人者の講師陣を迎えて、このミニシンポジウムを企画しました。

ピロリ菌（H. pylori）は、幼少時に感染したあと、生涯にわたり持続感染し、ヒト胃粘膜および胃粘膜粘液層内に棲息するグラム陰性細菌で、現在全世界の約半数のヒトに感染していると推定されています。古くは胃液の強酸性により胃内には細菌は存在しないと考えられていましたが、Marshall博士とWarren博士によりH. pyloriが胃に定着し持続感染して胃炎を発症する事が証明され、二人の2005年ノーベル医学・生理学賞受賞につながりました。ストレスやタバコ・飲酒などの複合環境因子と宿主の体質も関係して持続感染による胃炎・胃潰瘍を繰り返し、一部は胃がん・悪性リンパ腫等の悪性腫瘍を起こす事が分かっています。
様々な方面からのアプローチにより、胃炎発症、胃がん進展に関する詳細な研究が続けられています。また、消化性潰瘍や胃がんなどの上部消化管疾患の診療に関しては、バリウム透視や内視鏡検査、集団検診、がん登録、手術療法、内視鏡手術など、日本発あるいは日本がリードする方法論や診療技術が多い事も特筆されるところです。それは、日本ではピロリ菌感染が現在に至るまではびこっており、胃炎・胃潰瘍・胃がんに苦しむ患者さんも多い、いわば「胃がん大国日本」とも言える歴史と現実のなせる業とも言えるのかもしれませんが。

本ミニシンポジウムでは、ピロリ菌とその感染、炎症・発がんに関する基礎研究から、先端の診療と除菌治療・内視鏡経過観察による積極的予防など、それぞれの専門家の講師から研究・診療の現状と最先端についての講演を行ない、本ミニシンポジウム・シリーズの目的と当GCOEのミッションを果たす事を目指しています。最初に、加藤直也特任准教授より、他の講師の講演と関連づけながらピロリ菌と関連疾患全般についてのレビューが提示されます。その後、医科研関連の3名の研究者からの基礎研究の講演を行います。まず、小林一三教授より日本のピロリ菌のゲノム解読と世界各地の菌のゲノムとの比較解析による、日本のピロリ菌の奇妙な特徴、そこに至るゲノム進化の再構成、発見されたゲノム進化の新しいしくみについての講演。三室仁美准教授からはピロリ菌の胃粘膜への「持続感染戦略」と疾患発症に関わる病原因子CagA等の遺伝子群と蛋白やmicro RNAの生物学的機能、宿主上皮細胞等との相互作用に関する今までの研究などに関する講演。松田浩一准教授からは、数万人の患者・正常者のヒトゲノム解析からピロリ菌感染後に胃がんと十二指腸潰瘍のそれぞれになりやすい遺伝子多型の解析結果で明らかにされたABO血液型およびPSCA蛋白の多型等に関する講演です。

そして、慶應義塾大学医学部の小安重夫教授より、ピロリ菌と宿主生体の相互作用、特にその認識に各種免疫担当細胞と腸管のパイエル板が関わること、炎症を惹起するTh17細胞の分化機構などに関する最新のご研究についてご講演頂きます。

次に、医科研附属病院内科とピロリ菌外来において実地診療を行っている大野秀樹助教より、ピロリ菌感染と消化性潰瘍・胃がんの内視鏡診断、ピロリ菌感染血清診断、薬剤と内視鏡を駆使した内科的診療、H. pyloriの除菌療法から今後の胃がん診療に至るまでの講演を行います。加藤准教授からの最初のレビューと合わせて、ピロリ菌や胃炎･胃がん研究に基づいた臨床の現状と残された課題、未来への展望が見えてくる事が期待されます。最後に全体に関する質疑・応答を行います。

以上の講師陣から最新の成果についてもご講演いただき、今後の癌研究の展望を議論できればと思っております。ある疾患の研究の結果や経験が他の疾患の研究に多大な影響を与えると言うことは、医科学領域では今までもしばしば起こってきた事であります。自分の専門分野に「とじこもり」をせず、是非知的刺激とリフレッシュのためにもこのセミナーの「場」にお越し下さることをお願い致します。

事前登録･参加料無料の公開企画ですので、医科研で学び・働く、すべての学生・医師・医療スタッフ・研究者を始め、本ミニシンポジウムに興味を持たれる学内・学外のたくさんの皆様の御来聴を歓迎致します。

（文責：ファシリテーター　山川彰夫、加藤直也）